

学んでいるのは 無数の感動を創る授業

陽の光が差し込む体育館での跳び箱運動。どこか懐かしいこの光景。小学校の教員をめざす帝京大学文学部教育学科の学生たちが、「教科指導法(体育)」という実習に取り組んでいます。この日の授業の前半で学んだのは「器械運動の集団化」について。数人の学生で跳び箱を交差するように跳ぶアクロバティックな運動を行いました。指導するのは、自身も小学校教員をしていた経歴を持つ梅澤秋久先生。現場での多くの経験と最新の理論を融合させた授業に定評があります。「体育指導で大切なのは、運動を通して子どもたちが力を合わせ、新しいものを創り上げる経験をさせること。協働と創造がテーマです」という梅澤先生。特に集団で行う器械運動を成功させるにはコミュニケーションが大切で、めざすのは「こんなものを創ろうよ」「ここは自分が支えるから、そっちをやって」などと、子どもたちが相談しながら自発的に進めていく体育授業。そんな授業を経験したクラスや学年は、ぐっと仲間意識が高まるそうです。

実習の後半では、学生のひとりが先生役に、残りの学生たちが児童役や授業参観者役に分かれて模擬授業を行います。机上の知識で理解していることでも、実際にやってみると勝手が違うもの。先生役の学生がみんなの前に出て授業を仕切ります。「今日はバスケットボールを使ってドリブル相撲をします。コート内のエリアから、ボールや手足が出てしまった人は失格です。エリアの外へ出てください。でも50回ドリブルをすればエリアに戻ることができます。失敗しても終わりじゃない。チャンスは何度でもありますから、がんばってやってみましょう」。3者の視点から体験する実践的な学びの場で、学生たちはいろいろなことに気づき、その後、よかった点や改善点などを話し合います。よりよい授業を創りあげたいというみんなの思い。お互いを高め合う互恵的な関係が作れるのも、この実習のポイントです。

実際の教育現場では、体育の授業が上手な教師は、学級運営も上手なことが多いそうです。人に対して厳しかった子どもが、仲間に優しい言葉をかけているところに遭遇したり、いままでできなかったことができるようになった瞬間に立ち会えたり、さまざまな感動の場面を経験できる小学校教員という仕事。2012年に予定されている教育学部への改組の前に、学生全員で、ますます実践的なカリキュラムに取り組んでいます。

